
20時間

ウィリアム・輝夫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

20時間

【Nコード】

N9333S

【作者名】

ウィリアム・輝夫

【あらすじ】

私の20時間をここに完璧に表現しようという実験作です。

0時から1時まで

「グガツガツ」

という声で目が覚めた。喉がカラカラである。またしても自分のいびきの音で起きてしまった。それに関しては特に何の感慨もないが、私の住んでいるところは、壁の薄さで有名なアパートの一室なので、大丈夫かなあ、左右隣の人は…、と一瞬困惑するがさすがに、

「いびきがうるさいです」

という文句はいいにくいと思うし、そもそもそこまで大きないびきでもないだろうと、電気をつけて、テレビを見ることにした。深夜なので、イヤホンをつけることも忘れない。

テレビでは芸能人たちが、美女を相手に何やら話していた。テレビって何だろう。と私は思った。いつそのこと、このテレビを、窓から放り投げたかった。しかし、このテレビは家具つきアパートの家具なので壊してもしたら弁償金を払わないといけないし、そもそも窓から放り出したテレビを放置できるわけもなく、常に住民の監視の目は光っているのだ。

台所に行き、水を流して鼻をかむ。水を流せば、黄色い鼻水がシンクの穴に吸い込まれてゆく。どんどん鼻をかんで、黄色い鼻水を出す、頭がくらくらしてきた。一回、鼻うがいをしようかなと、思い、水をいつもの大きなコップの中に入れて、塩を少し入れ、水を鼻の穴に吸い込ませた。右の穴から左の穴へ。そして左の穴から右の穴へ。でもこれは、噂によると危険らしい。中耳炎になることもあるのだという。中耳炎は死ぬこともあるらしい。司馬遼太郎の短編小説で、そういう話があった。もつとも司馬の短編小説の主人公は侍であり、話の内容は、たしか仇討ちみたいなもので、主人公は死地を潜り抜けて、出し抜けに中耳炎で死ぬのだ。

私のような平凡な人間にはできない芸当であった。説明し忘れて

いたかもしれないが、私は平凡な人間であった。何かを誰かに褒められたことはないが、

「まあまあだね」

といわれたことはある。

その程度の人間である。そういえば、一回も天才だねといわれたことはない。いや、一回あった。

あれは私は現在、三十四歳なのであるが、十三歳のときに、フラフープで踊っていた。そのとき、たまたまフラフープの回転と私の腰の動きがシンクロしたみたいで、いつまでたってもフラフープは私の腰の周りから離れないのである。私を見ている周囲の目が変わった。

先生は、

「あんだ、いつからそんなフラフープの天才になったの」

と驚いたものであったが、後にも先にもそれ以外で褒められた記憶はなかった。でも多分、探せばそういうようなところはあるのかもしれない。自分で意識しないだけで、他人の目になって見たらあるかもしれない。そういうものはえてして、自分では気づかないものである。

今日は一日、休日なので自分のそんなところを見つめるような有意義な一日にしよう。と私は決意して再び寝たのであった。

1時から2時まで

暗い部屋の中で私が寝ていると、すぐ横の窓がゆっくりと開いて、パジャマ姿で横臥した真治が入ってきた。真治は空中に寝たまま浮遊して、部屋の中で停止して、私に背を向けたまま何やら呟いている。

「何で、オフ会…、呼ばないの…。」

何で、俺を呼ばないの。

俺に嘘をついたの。

何で呼ばないの。呼ばないの。」

私は、布団を引つ被り震えた。

「違う。違うんだ。あれは、ちよっとした俺の気の回しすぎなんだ。悪意じゃないんだ！違う。違うんだ。」

私は目が覚める。時計を見ると一時十五分であった。あれは明らかに、友人の真治であった。どうして浮いていたかは、私にはわからなかったが、彼のいわんとしていえることはわかった。

一週間前くらいに、ネットで知り合った人々とオフ会をやったのであるが、そのときに、事前には真治を呼んでおく、とっておいて、当日になって呼ばなかったのである。

それで真治は、腹を立てているのだ。どうして呼ばなかったのかというと、その日はとても暑い日で、彼は球場で野球の二軍の応援を昼の間にしており、自宅に帰って、夜の八時になって、

「今、ようやく風呂に入った。」

俺は、疲れたよ。」

というメールを送ってきたのである。

そのとき、酒宴は、始めたばかりであったが、酒宴が終わるのは十時だとして、彼が、やってくるのが九時。僅か一時間のために、昼間疲れた思いをした人間をわざわざ呼んでも、しょうがないような気がしたのである。

しかも私の携帯はそのとき、電源が切れていて、オフ会の他のメンバーがそのメールを受け取ったのであった。

私は即決して、

「あつ、彼が来ててももう遅いし、それに疲れているみたいだから、呼ばないでいいよ」

とその人物にいったのだ。

しかし、案に相違して、酒宴の後にカラオケに行くことになり、それからオールナイトのカラオケになった。

翌日、オフ会がオールナイトのカラオケになっていたことに気づいた真治は、

「あつ、俺ってハブられている」

と思っただに違いない。

ちなみに、私ならそう思う。

でも、それはノリでそういうことになったのである。そして、オールナイトのカラオケは、私を含めて三人だけで、他の人々は終電で帰った。もし、真治が参加することになったら、九時から、十一時半になるであろう。彼がオールナイトのカラオケに参加するとは思えないので。だから、どっち道、中途半端だし、参加しなくてもいいじゃない。という気はした。

しかし、彼は

「ああ、オールナイトでやってたの。

俺は行く気マンマンだったんだよ。

あつそ」

というメールを送ってきたつきり、それから今に至るまで連絡はなかった。『あつそ』の前のこの空白が、タメが、怖かった。彼の中の怒りがリズム良く表現されていた。彼のしゃべりは、たまに意味もなく遅くなるが、そういうのが怒り状態になって無意識に出たのかもしれない。怒りのレベルとしてはかなり高いのではないだろ

うか。

ちなみに、このオフ会には女性が二人参加していた。真治の中では彼女たちに対する期待ももちろんあったであろう。彼の中では、俺がギリシアのアテナやアフロディーテのような女神と酒宴しているようなイメージがあったに違いない。

しかし、私は凶悪な顔をして、彼との連絡を遮断した。すべては真治を腹立たせるために仕組まれた罠だ、とまで思ったかもしれない。皆で、あいつは俺を笑っている。そう。俺は孤独なピエロさ。笑え！笑うがいい。とまで思っているかもしれない。

「殺されるっ！

真治に殺される」

私はそこまで考えて、布団から跳ね起きた。

2時から3時まで

そんなことを考えているうちに、眠れなくなってしまった。心臓がドキドキするのだ。PCを見てみると、ネット仲間の平光という私より何歳か上の団子屋の息子が、オンしていたのでメールを送った。

「件名 真治のことが気になって眠れない。」

例の真治の件なんですが…。

ひよっとして、真治は俺のことを恨んでいるかもしれない。俺も、嘘でもいいから謝れば良かったんですが、何故だか、一切、謝りませんでした。というのも、俺の判断は間違っていないと思っっているからです。

そもそも真治は、何で、

「今、家の風呂に入っている。俺は疲れたよ」

なんてメールを送ってくるのでしょうか。もうその段階で、誘う気が失せるではないですか。彼は無意識に「行きたくないオーラ」を出しておいて、誘わなかったら

「行く気マンマンだったのに」

なんてメールを送ってきてそれからもう一週間も音信不通です。

彼の頭の中に何か故障している部分があつて、それが彼にそんなエキセントリックな行動をとらせているとしか思えません。

もちろん、俺にも非がありますが、でもそこまで、俺は真治のことを面倒見なきゃいけないのでしょうか。だんだん、この件に関して、考えていったら腹が立ってきた。

ひよっとしたら、被害者は俺なのかもしれない。奴はこうなることを見通して、俺に挑発のメールを送ったのかもしれない。そう考えるとすべてがうまくいくように思えるんですよ」

しばらくしてから平光からメールがきた。

「件名 あんまり考えないことです。」

まあ、あのとき、相手したのは俺だから当事者かもしれないけれども、もうそこは相手にしないことじゃないですか。お互いに三十路だし、分別も理性もあると思うんですよ。冷静に考えれば、トニーさん（私のハンドルネーム）が、意図的に、真治さんを無視したとはならないでしょう。だって誘ったのはトニーさんなんだから。もちろん、何でオールナイトになっているんだ。と訝しがるかもしれないけれども、もうそういうのはそうなっちゃったんだし、トニーさんの方で、その旨を報告したわけだし、それでも信じられないのなら、それまでの仲だったと思うんですよ。もう、手のつけようがない。

トニーさんにとって真治さんは、高校時代からの友人でしょうか、そういう友人がいなくなるのは悲しいことですが、でも、やっぱり友情ってそんなことでなくなってしまうってほしくないと思うんですよ。そんなことでなくなるのなら、それはもう本当に安っぽい友情じゃないですか。俺はこう思うんですね。

これは二人の友情を試す試練だと。そもそもトニーさんなりの善意で処置したことですからねえ。

でも、もし駄目なら駄目で、何とかありますよ。徳は孤ならず、必ず隣あり。という言葉があります。トニーさんなら大丈夫！俺も及ばずながらバックアップしますよ」

私は布団の中でそれを読んで涙が出そうになった。さすが平光。彼はフットサルを趣味にしている爽やかにして、熱い男である。（私は彼のやっているフットサルに参加して途中で足腰が痛くなり呼吸困難になって棄権したことがある）しかし、アドバイスはアドバ

イスとして受け取ることにして、私は自分なりにシミュレートしてみたくなった。これから、布団の中で目を閉じて、真治になり切ろうと思う。そしてすべてを、彼の身になって仮想体験してみたい。簡単にいうと、妄想することであるが、私は自分の妄想力には自信があつたし、彼のメールという手がかりもあるので、ことは容易なはずである。その結果から、次にどんな行動をとるか考えてみても遅くはない。

3時から4時まで

真治は、オフ会前日に、私の掲示板にこのようなコメントを書いたのである。

「明日、昼間は鎌ヶ谷スタジアムで二軍の日ハムVSロッテの試合を1人で見に行くので、試合は夕方終わるから、終わったら連絡するよ。ただ一旦家に帰るから参加するとしたら相当遅くなるし、参加する方々にあらかじめ言っておくけど、人見知り激しいうえに、人の好き嫌いも相当激しいから、自分と合わないなって感じた時点で、全く話さなくなる人だから（苦笑）、それで良ければ、顔出しするよ（笑）。

まあ、トニーから適当にうまくわしの印象を説明しといてくれ（笑）。

わしのポイント上手く上げといて（笑）」

彼の中では、多分、ちょっとしたユニークな挨拶みたいなものだったであろう。でも、何かちょっと腹立たしいものが含まれている。それは、自分のことをいきなり「人見知り激しい人で、合わないと思ったなら話さない人だから」と書いてしまっていることであろう。

自己紹介するにとしては、致命的な自己紹介であり、予め、そんな自己紹介をする人間に会いたいと思う人がいるだろうか。そもそも人見知り激しいのだったらオフ会にこなければいいのである。しかも、「合わないと思ったなら話さない」と、オフ会に関して非協力的なスタンスを表明している。でも、トニー（私）が参加をしつこく誘うものだから、俺はしょうがなく行ってやるんだ。という心理が

どこかチラチラ伺える。

もちろん、本当はそういう人間ではなく、彼の中ではずっとばらんに自分の性質を話して、そして、皆に対して警戒心を持たせまいとしたのかもしれない。でも、それがまったく逆に作用してしまっている。私はこのコメントにこう返した。

「自分で自分のことを悪く書いておいて、俺にポイントを上げておいてくれ。なんて書くなよ。だったら、自分のことを悪く書かなきゃいいじゃないか。」

まあ、真治はそういうやつです（笑）」

もう私はこれで、彼を誘う気が八十パーセントくらい失せた。何で、せつかく多くの人と触れ合うチャンスにそういう駄目なコメントを書くんだろうか。センスが悪いとか、人慣れがしていないとか、そういう問題だけではないと思う。

私は、何か、この真治という男は、私という人間をどこかで馬鹿にしているんじゃないのか。という気がしてきた。オフ会は、確かに、彼を無理に誘おうと思えば、誘えたが、それを断ったのは、この明らかに少し舐めたコメントの威力によるところが大きい。

言い換えるなら、携帯の電池が残り少なくて、オフ会も楽しかったし、段々、こんな非協力的なことを表明する人間のことはどうでも良くなってきたのである。

でも、彼はそういうことを汲んではくれないだろう。彼は、まず私が嘘をついたことに対して怒っているに違いない。嘘は何よりもいけないことである。明白に、酒宴はやっていたのに、やっていない。と嘘をついた。何で、そこで事情を説明しなかった。説明ぐらいいちちゃんとしろ。というやつ論理がある。

私はもうそういうのを相手にするのが面倒になってきた。だから謝らないのだ。謝るのなら、まず、真治の方で、舐めくさったコメ

ントを残して、私に誘う意欲をなくしたことに關して謝ってほしい。

しかし、彼は決して、そういう反省はしない男である。そういえば、彼は前にこんなことをいつていた。

「俺さ。トニーのオフ会とかいうから、どんなオタクっぽい奴らが集まってくるのか、って思ったけれどもさ。参加してみても驚いたよみんな普通の人じゃん」

この発言も考えてみると、腹が立つ発言である。っていうか、手前だってオタクっぽいだろ！ふざけんな。何、一人だけ「いけている人間」みたいな顔しているんだ。

こいつのかっこつけは何なのか。もう無様を通り越して、悲しくなってくる。何で、意味もなく強がるのか。そんなに強い人間でもないくせに。

それに関連してのことであるが、半年前、私は一回激怒したことがある。彼は、自分のネット上の日記に自分のことを、散々、人見知りの激しい内向的な人間だ。と書いておいて、私が慰めたら、

「まあ、そんな俺は、お前よりは社交的だけどな」と返してきたのだ。

私はこれには本当に日本刀で叩き斬りたくなるくらいに怒った。

ついには電話した。

「おい、聞け。」

おま：お前が、自分は内向的って悩んでいるから、俺は慰めたんだろつ。

それを何だ。

俺が社交的じゃないって何、決めつけているんだよ。ざけんじゃねえぞ。

そうか、じゃあ、お前より内向的な俺がいるんだから、安心できるじゃねえか。つか、俺は自分が内向的って悩んだ覚えはねえよ。

そんなすつごく内向的だったら、オフ会だって開けないじゃねえか。延々とオフ会開いて誘ってやっているだろ。そういうの、お前

の中でノーカウントなの。

俺は確かに、コンビニ夜勤アルバイトかもしれないが、お前みたいにグジグジ悩むような人間じゃないから。

もう本当に何だよ。

なんなんだよ、あんたは」

という具合に怒ったのだ。

彼は謝ったが、今回のあの舐めたコメントといい、あんまり反省していない…というか、ひょっとしたら、真治は、自分のやっていることが、他人にどう思われるかまったく考えない、というか、そういうのが感覚として、わからない人なのかもしれない。と、私は薄々思い始めていた。

世の中にはいるのだ。こういう相手の心を考える能力が、先天的に足りない人間が。彼にはそういう資質が多分にあった。

そうだとしたら、しょうがないことと諦めるしかないが、でも何らかの方法を使って、そういうあんたって非常に危険だよ。と教えておいたほうがいいのかもれない。

と、私は寝転んで、真治のことをシミュレートするというよりも、たんに自分の気持ちを追体験しただけだったな、と苦笑し、それから、真治に関係あること、関係ないこと、色々考えているうちに寝てしまった。

4時から5時まで

しかし、二十分くらいたつと起きてしまった。段々、真治のことを順を追って考えれば考えるほど腹が立ってきた。半年前に私が激怒した事件のことをもつと詳しく書かなくてはいけない。

確か、真治は自分とはそんななじみのない仕事関係の人間との飲み会に欠席して、それをもってして、自分は内向的な人間だと落ち込んでいたのだ。それに対して、私はふざけた感じで、手のひらに「の」の字でも書けばいいんじゃない。自意識が過剰なんだよ。と書いたのである。

そうしたら

「まあ、そんな俺もお前よりは社交的だがな」

と彼は書いたので、私が自業自得な部分もあった。しかし、そういうことを度外視して、一度考えなきゃいけないのは、

「内向的＝悪」

という単純な思い込みである。

私は確かに、小説を書こうとしたり、音楽をきいたり、わけのわからん文章をネットでアップしたりして内向的であるが、それ自体が悪なのではない。

それが証拠に、彼と同じような立場になったときには、私は飲み会に参加したかもしれない。その場の感じを察知して、行けそうなら行くし、行けなさうだったら行かないであろう。

それを行かないのもってして「内向的」というのなら、彼は、私と同じ立場に立ったら、行かないであろう。と、勝手に決めつけているのだ。そうでもない。

それも腹が立つが、彼はとにかく、内向的が悪だと思っているふしがあり、私をそんな内向的な自分以下だ、と書く、ということは彼の悩んでいることすべてが、私に覆いかぶさってくることになる。

私にしても、それほど、仕事仲間と仲がいいということもないが、でも、彼ほど悪いのかどうなのか、彼にもわかりっこないのだ。それなのに、勝手に悪と決めつけてしまうのである。

これでは誰だって怒るであろう。そもそもが私は仕事仲間と仲が悪いなんて彼には一度もいったことはない。それなりにやっている。

とにかく、彼は明らかに自分の方が上だ、と思っている。自分は悩んでいるが、その悩みのレベルは私よりは上だと考えているのだ。私は、彼よりも底辺にいて、そこでグジグジやっていると思っているのである。

私が怒りたいのはそこなのだ。

それは私は半分ニートみたいな生活をしているかもしれない。しかし、本当に彼以下かどうかは、わからないではないか。二人ともまったく別のことをしているのだから、比べようがない。社交に限定しても、私が社交的ではない。と考えるのは、早とちりもいいところである。

でも、それを考えたら、怒る私の方もアホ、ということになる。勝手にしておけばいいのである。彼が内向的な自分に悩んで、勝手に私はそれ以下だと思っている。そして、自意識過剰で、私や私のオフィスのメンバーへの配慮が欠けている。

別に、それをもってして、彼が明日、警察に捕まり死刑になる。ということでもない。普通の人間に良くある普通にいけすかないことである。それならば、放置しておけばいいのだ。わざわざ知らせる必要もないのである。

それと同じ論理で、私だってそんな彼に、オフ会は実は続いているといちいち報告する義務もないのである。

「そう。」

「こんなことはどうでもいいことなのだ」

とつぶやいて私は寝た。

5時から6時まで

私が、寝ているのか起きているのかわからないような感覚のときに、また窓が開いて、後ろ向きになってパジャマ姿で横になっている真治が浮いてやってきた。

「嘘ついたんだよね。嘘ついたんだよね。嘘ついたんだよね」

「違う！だから、あれはお前も悪かったんだ。お前が俺に…実はオフ会は続いていると教える気をなくしたんだ」

「俺がききたいのはそういうことじゃないの」

急に萩本欽一みたいな口調でいつてから、

「嘘ついたんだよね。嘘ついたんだよね。嘘」

というと首が180度曲がってすごく無理な体勢からこつちを見た。

「あつ、無理無理無理無理」

その首の動かし方、無理無理無理」

と私が叫ぶと目から血の涙を流しつつ、

「嘘ついたんだよね。嘘ついたんだよね。嘘ついたんだよね」

と真治は叫んだ。

目を開けると真治はいなかった。体中に汗をかいていた。私は起き上がって、シャワーを浴びた。携帯を見ると、また平光からメールが来ていた。

「件名 何だか誘って欲しがってましたよ」

俺も、彼のことはよくわからないんだけど、確かに、あのときは、すつごく誘って欲しい。ということ进行全面に出していたような気がしますね。だって、『今、風呂から出た。俺は疲れたよ』というのを、俺とトニーさんともう一人に一斉送信しているんだから

そんなこと一斉送信する情報じゃないでしょ。

でも、誘っても、気が合わなきゃ話さないんでしょ（笑）。なかなか難しい相手ですよ。っていうか、正直、最近流行の言葉でいえば、

『めんどくせ〜』

って気がしたのは確かです。誘って欲しいなら、

『いやあ。今日楽しみにしているんですよ。盛り上がっていますか』

でいいじゃないですか。

それなのに、

『俺は疲れたよ』

ですからね。

『悪いけれども俺は人見知りだから』

『合わないと思ったら話さないから』

『俺は疲れたよ』

ですからね。

どこまでツンデレなキャラなんだって思うじゃないですか。そんな非協力的なやつ、いらんし（笑）

どこかで、俺様気取りというか、

『皆も期待している俺様がここで登場だよっ』

ってのが透けて見えますよね。

いや、周りもそこまであなたに期待していませんから。

って、俺も思いましたよ。

で、しかも、誘わなかったら

『俺って行く気マンマンだったのになあ』

って。

お前の心の中をどうしてそんなにいちいち忖度しなきゃいけないんだ。もういいかげんにしろ。と俺がトニーさんだったら思つかもしれない。

っていうか、俺がトニーさんでなくても、そう思ったけど（笑）「

私はタオルで頭を拭きながら思った。でも、これが彼の愛情表現なのである。彼は心を許した相手に対して急にそういう態度をとるのだ。それで喧嘩して友人を一人なくしているのをきいている。私も心理としてはそういう態度をとるのを納得できなくもない。ひよっとしたら私にしても親しい友人にそういう態度をして、冷たくされたこともあったかもしれない。でも、やはり大人である。そこは分別をつけなくてはいけないし、やはり他のメンバーに失礼だ。まず、彼に、そういう舐めた態度をとったら嫌われるよ。ということ覚えていただくしかないのだ。そうでもしないと、例えば、結婚したらDVとかに走りそうだから怖くもある。そう。私のやった決断は正しいのだ。

「でも嘘ついたよね」

という言葉が急に耳元でふわっと広がった。私は、辺りを見るが誰もいなかった。確かに、酒宴はあったし、彼が行っても平気で、二時間くらいはいられただろう。だが、それは中途半端だったことも事実なのだ。それは彼のためを考えてつかなくはない嘘だった。とも考えられる。

窓から差し込む青い光の中、携帯が鳴り始める。まるで私の思念に答えるかのようなタイミングで鳴ったので、驚いて私は携帯をとった。

6時から7時まで

時計を見ると六時二十分。しかもその時計は家の時計ではなくて私の働いているコンビニの壁にかかった時計であった。どうしてこうなったのかというと、急に、朝勤の奥さんが風邪をひいて、私にバトンタッチとなったのだ。私は、慌てて髭を剃って、コンビニに向かう。自転車に乗って五分もないところにコンビニはあった。

途中、黒いサンバイザーを被って、顔の目部分以外に白いタオルを巻いているおばさんが歩いていて、それはどう見てもお化けであり、一瞬、真治の使わした刺客ではないかと思ったが、たんなるおばさんだった。いつも中学校の前を通るのであるが、ワンピースを着た黒い髪の若い娘がしゃがんでいた。ただそれだけで怖いものがあった。

そうしてようやく到着して、朝勤の仕事は、レジ側と外側と二つの役割があつて、私は楽そうな外側を担当する。箒とちりとりで、庭を掃除すると、デッキブラシとバケツと洗剤で、店の窓の前のタイルの部分を掃除した。

この店は郊外にあり駅前にはないので、朝はそれほど混まないが、たまにわつと客が来るときがあつて、そのときは店内に一人しかいないので外にいる私は中に入ることになる。今日はそういう兆候はなく、スムーズに少数の客が出たり入ったりしている。

夜勤の伊上風太郎（22）が私に

「いやあ、佐島さん。災難でしたねえ」

と喋って自転車に乗って帰る。

「もう、困っちゃうよねえ」

という私はデッキブラシでタイルをこすった。

「さようなら」

ともう一人の夜勤の飯井口治（22）も礼をしてバイクに乗って去る。

「うらやましいよなあ」

と口の中で呟くと、窓の向こうの店内のレジでは、山之内美紗緒（47）が私に向かって手を振っていた。

私は急いでレジの救援に向かう。そして、客をさばく。

「いやあ、さつき入り口の新聞を見たんですが、民主党の小沢一郎が代表戦に出るらしいですね」

「そうだねえ。でも、小沢さんが首相になったら、新しい政治ではなくなるよね。自民党の政治と変わらないよね」

「そうなんですか。でも、そうかもしれないね。」

俺的には、実力のある人間がちゃんと政権をとって、政治を円滑に運営してほしいって思うんですがね」

「でも小沢一郎じゃなあ」

と山之内は苦い顔をした。

「誰がいいんですかね」

「うーん。そういわれたら、わかんないけど」

「俺はいつそ小沢だと思いますねえ」

「小沢じゃなあ」

と山之内がしぶるのを無視して私は外に戻る。

山之内とはよく政治やスポーツの話をするのであるが、あまり意見が合わなかった。合わないというよりも、向こうがわざと合わせようとしていないようなふしもあった。

それから、ため息をつきながら、ゴミ箱のゴミを捨ててドアを拭いたりしている内に、七時になった。

7時から8時まで

それから私は、煙草のカートンをバツクルームからカウンターへと出して、カウンターサイドの夏なのに売っている暖かい飲料を少し出して、そして店内を歩いて、トイレトペーパー、うまい棒、カップラーメン、スナック菓子系などの減りやすいものを調べて、バツクルームから出して陳列した。

その間に客の流れが頻繁になったので、もちろんレジなどに入ったりする。八時に廃棄する商品がいくつかあるかもしれないので、事前にそれを調べて、今日はなかったもので、さらに、店内をウロウロして、飲料などの顔出しをする。これは模様が全部前に揃うようにすることである。

それが終わるととうとうやることなくるので、棚掃除をすることにする。箱のついているキャリアと店内用ダスターを手にして、棚掃除分担表を見て、私の今月の担当の中から、スナック菓子の棚を選び、その棚まで行き、商品を箱に入れて棚を拭く。そのとき、ついでに商品の賞味期限を調べて、それが切れていないか、切れそうなら分担表に書き込んで行く。

その間にもレジに人が並んだら、すぐに駆けつける。いつものスキンヘッドのタクシーの運ちゃんが出てきて、ユーモラスに

「いやあ、今日は暑かったねえ」

ということをいう。

普段は、マイルドセブン8ミリのところを3ミリにしたらしい。

「変えたんですねえ」

という

「俺も、もう60越しているけどさ。やっぱり健康には気をつけなきゃって思ってるね。でも、煙草をやめるってのはできないけどな。ハッハッハッ。」

「じゃあ、今日も頑張るわ」

る表を探して、テーブルを用意して菓子を陳列しておいた。

夜勤の人々は優秀であり、こういうことは滅多になかったので、少し慌てた。

「いやあ、あせりましたよ」

と山之内に話す

「大変だったね」

と山之内は、私に日用雑貨の発注の紙を渡す。

「はい、これお願いします」

バックルームに行つて、PCに打ち込んで送信する。

それが終わったころには八時であつた。八時は廃棄の時刻であるが廃棄はなかつたことを思い出す。棚掃除のために出した箱のついているキャリーを置きっぱなしにしていたことを思い出し、それをバックルームにしまい、今度は、CDCの什器を乗せるためのキャリーを出しておく。

こうやって書いてゆくとすごく忙しそうであるが、実はそうでもなかつた。

8時から9時まで

段々、お客が増えてくる。これくらいになると、変な男が店にやってくる。彼は本棚で柱を背にしてしゃがみ込み、テレビ雑誌を読みながら一人でぶつぶつしゃべり、

「二宮君！」

と急にタレントの名前を叫ぶ。

それをレジやったりしながらきいていると、結構、面白い。

「マイキー(?)」

とも絶叫する。

それはマイキーではないかもしれない。彼がいつも口にするので知らず覚えてしまっている。

「やめてください」

「良かったね！」

「先生のことだから」

「しんちゃん、しんちゃん」

とか、いろいろなことをいったりする。お客なども吃驚するが、それ以外に悪いこともしないみたいだし、近所で有名な人らしいので、特に注意などはしない。

彼は、よく見ると、スポーツマンタイプの好青年みたいで、たまにうまい棒などを買うのであるが、そのときに、

「僕の顔見て」

と目を見ればたたかせ、しばらくためてから、

「あつ、ありがとね」

と挨拶をして去る。

それに私は何度も笑わせられた。あまりにも意味不明だし、それだからこそ、何を狙っているのかわからないので、面白かった。

また私が笑うから、彼はそういうことを繰り返してやる。

などということを思い出しつつ、私は、弁当や惣菜などが配達さ

れてくるのを待つ。

五十くらいの小柄な角刈りのおじさんがやってくる。

「おはようございます」

と元気良く挨拶をしてきて、とんとん、キャリーに乗せる。私はそれをバツクルームに運んで検品する。ハンディースキャンがあつて、それでバーコードを打つと検品できる。

弁当や惣菜は箱のような什器に入っており、それを三十箱くらい検品し終わると私は、デザートなどを並べる。他は昼勤の奥さんがやってくれる。

並べている間に、レジが混雑したらもちろんレジに入る。結構、このタイミングで込むことは多い。客層は、やはり出勤などをする人が多い。

ミルク少女もやってきた。前にもいたかもしれないが、私はミルク少女と心の中で名づけている女性が二三人いるので、そうであっても別に不思議ではない。

そろそろ九時になるかというところに昼勤の奥さん方が二人やってくる。私は、温度点検をする。温度点検は、弁当や冷ケースなどをやる。いつも九時ごろになると、機械の温度調整のためか、温度は通常の温度と違うのであるが、それでもかまわずにつける。何で温度の変わり目に、温度点検しなくてはいけないのかよくわからないが、そうなっているのしょうがない。他の店では時間をずらしていた。

奥さんが、デザートの一つを取り出して、

「これっておいしいですよ」という。

「おいしいんですか。」

「じゃあ、買おうかなあ」という。

ちなみに、どうして名前を紹介しないのかというと、面倒だからであり、そもそもさっきの三人も一瞬しか出てこないのに、わざわざ

ざ名前と年齢を紹介してしまった。しかも年齢はずらしているし、名前は仮名だし、ほとんど、労あって意味がないのでやめることにした。

そうこうしている内に、レジの点検が終わって、私と山之内は退場ということになった。退勤登録を終え、

「今日は災難でしたよ」

という。

「災難だったねえ」

と山之内は答える。

私は彼が暇そうだったので、真治のことを話した。すると山之内は、

「かまってちゃんだね。それは。アハハハハ」と笑った。

そして別れた。私は、ジャンボソフトクリームというアイスを買って、それを齧りながら自転車で帰った。日差しがすごく熱く、早く風呂に入りたくなった。

「俺は疲れたよ」

と思わずつぶやきそうになったが、それだと真治になりそうなのでやめた。

9時から10時まで

夏のサランラップで包んだような蒸暑い日差しの中を自転車をこいで、アパートまで戻り、汗だくになったので服を即座に脱いで、シャワーを浴びた。タオルで体をふいて、携帯を見ると、平光から着信があったのでかけてみる。

「おはようございます」

「あつ、どうも」

「今日は暇ですか。トニーさん」

「ああ暇ですよ」

「じゃあ、会いましょうよ。急ですけど」

「いいですね。」

っていうか、俺は、今日、真治に会おうと思っているんですね。

何であんなことをしたのか、その真意を探ろうと思ひまして

「面白そうですね」

「いっそのこと、三人で会いましょうよ」

「いいですよ」

「じゃあ、また今度電話しますので」

と電話を切り、今度は真治にかけてみた。

「おお、トニーさんか」

「ご無沙汰ですわ」

「どうしたの」

「最近、暇なんだよね」

「ああ、現在休職中だからな」

「じゃあ、今日会おうぜ」

「別にいいよ」

「平光さんもいるから」

「ああ、いいね」

「じゃあ、F駅の近くにあるファミレスのJで会おう」

「わかった」

「二時に会おう」

「うん」

「それじゃあね」

と切るとまた平光に電話した。

「面白いことになった。」

二時に会うことにしましたよ。

三十分くらい前に会って、どういう戦いをするか作戦会議をしましょつ

「へえ。」

トニーさん戦つもの

「戦つわけじゃないけど、何ていうのかな。」

「こつこつって、ある意味、戦いじゃないですか」

「そうか。」

「何だか知らないけど、俺、ワクワクしてきたぞつ」

と平光もテンションが上がっているようだった。

「じゃあ、F駅の近くのファミレス」で会いましょつ。

「一時半くらいにね」

「わっかかりました。」

「真治がどう出るか楽しみですね」

「俺も楽しみですよ」

「というと電話を切った。」

クーラーのスイッチをつけて、私は録画しておいた大滝秀治のドラマを見ることにしたのだった。

10時から11時まで

テレビで再生される大滝秀治のドラマを、ポテトチップとコーラ片手に、私は寝転びながら見ていた。大滝秀治はいつ見ても飽きない。彼の頭頂部がとんがっているのは、私と似ている。そして、あの威勢の良いハゲっぷりも見習いたいところである。目はもはや人間のものではなく鳥類に近くなっている。頬は、ふくらんでいて、少したれさがっている。まるで、半分仙人のようになっている。

あのような老人になれたらどんなにいいかと私などはいつも思うのだ。彼の動きすべてに独特の風格があった。よく、彼は演技上手という話をきくが、私は芝居などにはうといのでよくわからないが、彼の動き、これはほとんど拳法などにも通じらると思う。それほどよどみがない。自然なのだ。それがドラマにどういう影響を与えているかまではわからない。ただ、私は大滝秀治という、このこくのあるワインを味わっている。そのひとときが非常に素晴らしい贅沢なのだ。

ドラマは一時間で終わるものであり、どうやら金持ちらしい大滝秀治には一人息子がいて、進路でもめている。彼は銀行家になるべきだったのに、歌手になると言い出したのだ。それで大滝秀治は怒り、

「おまえなんかどこにでも行きやがれ」

と息子に張り手をくらわすのである。自分の張り手に全体重をかけたために、よろけそうになるが踏みとどまる。

息子は怒って

「何だ。この糞じじい」

と秀治と取っ組み合いの喧嘩を始めるが、息子が断然優位なのを周囲の人間に止められる。

そんな場面を回想しつつ秀治がレコードを回すと、息子の好きだったベートーベンの第九が流れる。少しかすれ声で、十分すぎるほ

どの間をとってから、秀治はつぶやいた。

「俺はもう、何のために生きていったらいいんだろうな。」

わからない。

わからなくなつたよ…」

息子の写真立てを手に取り泣く。

そして、次の日、広い家のブランコに乗りながら、海を見つめる秀治は、そこに死んでいった息子の幻影を見る。いかにも昭和の頭の軽そうなホステス風女性と話している。

「ねえ。一緒に死のう」

「うん」

「もう、それしかないね」

とあって、恋人と一緒に海に飛び込んだ息子が、波間に見えるような気がして、息子の名前を叫びながら、海に進んでゆく秀治。足が上手く動かずに、転びながら、海へ海へ…。息子を助けるために、秀治はどんどん海の中に入ってゆく。すると秀治はいつの間にか、青年に戻っており、子供を肩車している。

「お父ちゃん、冷たいよ」

「ハハハハハ」

と笑う。親子はそのときは非常に仲が良かったのである。

しかし、そんな妄想とは裏腹に、秀治は息子のことを思いながら、ブランコから落ちて老衰のために死んでいたのであった。

私は半分、眠りながらそのテレビを見ていたので詳しい話の筋はよくわからなかったが、彼独特の、秀治っぷりを満喫できたので満足だった。いくら、息子の肩身とはいえ、延々第九を聴いていないで、田園交響曲とかエロイカとか別のものを聴いてもいいんじゃないかと思うが、それはもう執念と妄想と老化現象が入り混じっているのである。そんな老人を秀治は体当たりで演じたのだ。

私はそこまで考えてはつとずる。ひよつとしたら、私がこれから会おうとしている真治も、何かを演じていたのではなかったであろうか。ハードボイルド的な何かを演じ、それで、あのアテナなアプ

ロディーテにもてようつしたのに違いない。と私は寝る寸前に理解した。

11時から12時まで

私は畳の上で、怠惰に寝転びながら、頭はさすがに枕の上に乗せて、隣にCDを置いて、アントニオ・ヴィバルディーの「マンドリン協奏曲」を聴きながら、「クレイマー・クレイマー」という映画のことを夢想していたが、不意に、唸り声をあげ犬歯が少し出た。

そう、真治のことを思出したのである。どうして、あの場であんなわけのわからない強気キャラを演じたのだろうか。実際に会ってみたら、普通の癖に、何で、強がるのだろうか。いや、そもそもが強がってさえないのだ。

「俺は、人見知りだから」

なんていうのは強がりではない。かといって弱がりでもない。俺は人見知りだから話さない、と非協力的なスタンスを取りたかったのであるうか。こういう発言をする人間は、外見が少し渋いのなら格好がつくだろうが、彼はそういう人間でもないのだ。

まあ、一言でいうのなら『さえない青年』であろう。もし、彼のコメントに女性が注目するとしたら、そして、彼に実際に会ったとしたら

「イラッ」

としたかもしれない。

その感じは私にもわかるのである。彼は、まるで「チクタクバンバン」というおもちゃの電車みたいなやつなのだ。ちゃんと線路を敷かないとすぐにはみ出して落下するし、しかもタチが悪いのは、ちゃんと線路を敷いても、ちゃんと進まないのである。考えてみると「チクタクバンバン」以下である。

彼が私と会うといつも

「トニーはいいなあ」

みたいなことをいうので、呼んであげたのに、それにも関わらず、何で

「俺は人見知りだ。合わないやつとは話さない」

「俺は、疲れたよ」

なんだろうか。

しかももつと腹が立つのは

「行く気マンマンだったのに」

である。

これはもう何回か書いてあるかもしれないが、繰り返し思い出すたびに、いまいましくなってくる。

人類の歴史は、進化の歴史といってもよかるう。それなのに、何であのような進化をゴミ箱に捨てるようなわけのわからない生物が出てくるのだろうか。あの変種は何を目的に作られたのだろうか。会っていても思うのだが、彼の周りでは時空が歪んでいた。何かが狂っているのであるが、それを今まで指摘できなかったのである。私の気のせいとまで思っていた。しかし、今回の件でわかった。

彼には決定的に

「論理性」

が欠けているのだ。

一回、自分の論理性の欠如をちゃんと考えないと酷い目にあうかもしれない。と私は思ったが、しかし、彼はすでに酷い目にあっていた。というのも職場の連中と仲が悪くなつて会社をやめていたのである。それも、彼の欠けている論理性の問題であろう。

彼は不思議と周囲の人間から嫌われていた。というのも、多分、私が接しての推測であるが、『自由気まま』すぎるのだ。しかも、外見はそういうタイプでもないのである。明るくはなくて、いつも苦虫をかみつぶしたような顔をしている。それを黒い縁の眼鏡で隠しているような感じである。初対面の人間にはものすごく臆病で、またその恐怖がすぐにわかるように目を剥くことが多い。そんな彼のぎこちなさは、しかし、私にはすごく面白かった。

一回、彼と一緒に、コントをやったことがあるのだが、すごく受

けたのである。というのも、彼が怪獣役をやっており、顔を真っ赤にして

「がおお

がおおお」

といいながら、辺りのものを壊す演技が、本気にしか見えなかったからである。彼は恐怖とか暗い演技とかさせたら、すごくマツチするであろう。そういえば、外見は佐野史郎に似ていた。だが、彼の中ではそれは不名誉らしく、髪型を変えて、必死に自分の中の佐野史郎を消そうとしていた。

でも、今日、会うとしてどうすればいいのかわからない。彼に怒ればいいのだろうか。しかし、今回の件は、自分で自分のチャンスを無駄にただけである。しかも、オフ会に呼ばなかったのは、私なので逆にこっちが釈明する必要さえあるのだ。

もちろん、そんなことはしない。ただ、彼がどうして、あんな非論理的なことをしたのか知って欲しかった。そして再発してほしくなかった。それだけなのである。もちろん、それは表向きかもしれない。私の無意識の中に彼への憎しみなどもあるかもしれないが、そうであったとしても、やはり一番、優先されるのは

「己のアホさ加減を知れ」

ということに他ならない。これを知ってもらわないと、私の中では本当に落ち着くものも落ち着かないのだ。怒りの感情というものは、何で相手がそういう行動をするのかわからないことにあるが、まさに今、私の心臓に理不尽の矢が刺さっている。これを彼に抜いて欲しいのである。別に説教などはしたくはないが知って欲しい。あなたは、わけわかないことをしたんだよ。と。

12時から13時まで

私は自分のみすばらしい家から神妙な顔つきをして外に出て途中で自動販売機にてジュースを買って、それを飲みながらゆっくりと時間をかけて移動して、最寄の駅につき電車に乗って座席に座りながらまた真治のことを考えていたが、それはさきほど紹介したのと同じようなことであり、わざわざここで詳述するようなことではなく、そうこうしている内に電車はF駅だったのでプラットフォームから階段で降りてファミレスJまで少し迷いながら歩いて到着したら十三時を少し過ぎていた。

13時から14時まで

そして十三時二十分あたりにファミレスのJに行くと、窓際の席に平光はいた。彼は、一瞬、テニスプレイヤーのように見える薄緑のスポーツテイーなTシャツを着ていた。

「にしても、どうするつもりなんですか。トニーさん」

「どうしようかね。実は俺の中でも決めていないですよ。でも一喝しなきゃいけないなあ、とは思ってますよね。といつても、多分、あいつ他人の言葉を記憶しない人間だからねえ。昔からそうだけれどもいつくらいつてもきかないのよ」

「頑固者なんですかね」

「頭のいい頑固者ならいいんですが、馬鹿なんですよ。馬鹿が頑固者になつたら手がつけられませんか」

「というとは、日替わり定食を頼んだ。」

「俺はよくわからないんですが、真治君は何を求めているんですか。威張りたいたいんですかね」

少しニヤニヤしながら平光はきいてきた。

「うーん。威張りたいたいでしょうね。でも、このオフ会の俺自身、そんなに威張っていないじゃないですか。他の人も特に威張っていないで普通なんですよ。そういう中で、何で彼だけ威張ろうとするのかね。それがわかんないんですよ」

「いやあ、俺はそういうところというか、全部、わからないですね。普通、気に入られたいのなら、そういう風にするじゃないですか。でも彼はそうはしなんですよね」

「何だかすねている、というか、いじけているというか」

「ですよ」

「それは前にあったことが原因なのかもしれないなあ。実は俺とあいつの中には深い遺恨があるんですよ」

「そうなんですか」

「今回は、それを吐き出そうと思っっているんですね」

というようなことを話し合った後で、軽く世間話をして、十四時になるうかというときに、真治が現れたのであった。

彼は、挑むような目つきをして、私たちの席まで歩いてくる。そして、

「いやあ、疲れたよ」

といった。

「そうだな。久しぶり」

「お久しぶりだねえ」

というと、座って腕を組んだ。

「で、今日は何のために集まったの」

ときいてきたので、私は

「お前を糾弾するためだよ」

と心の中で叫んだ。

14時から15時まで

「実はここに呼んだのは他でもない。この前のオフ会について、注文をつけたいというか、抗議をしたいと思って呼んだんだ」

「といって私は真治の謎をはらんだ行動の一つ一つを滔々と述べ立てた。まるで弁舌家のようであった。」

「以上、とにかく何で、あんな不貞腐れた態度をとったんだ。それを教えて欲しい」

真治は真つ赤な顔をしてきいていたが、急に反撃してきた。

「でもそれって、別にそんなに大したことではないだろう。俺は、あくまで低姿勢に『俺は人見知りだから』って書いたんだよ。それが何で高圧的になってるかわからないし。しかも、『俺は疲れたよ』っていうのも本当に疲れていたんだよ」

「でも、それをわざわざ三人に一齐送信することはないだろう」

「それにはちゃんとした理由があるんだよ。前に俺はお前のオフ会に参加して、一時間近く待たされたんだよ。そっちがカラオケに熱中していて、俺は待ちぼうけをくらったんじゃないか。だから、今回はそういうことがないように、三人に一齐に送ったんだよ」

「そうか。そういえばあったね。そういうこと」

「というと私は少しひるんでしまった。」

「でもさ。」

あのとときは疲れていたんだろう。何で、後から『行く気マンマンだった』なんていうんだよ」

と私は、彼の第二の論理矛盾をついた。

「それは、でもさ。」

「こういふことなんだよ。」

『疲れている、ということとは事実だし、それでも『行く気マンマン』だった。ってことは確かだったんだよ。さあ、これから風呂浴びたし、またやるうかな。ってな。そんな準備OKみたいな感じだった』

んだよ」

「でも、そんな微妙な心理は伝わらないだろう」

と私は怒鳴った。

「伝わらないかもしれない。それはわかるよ。でも嘘をつくことはなかったんじゃないか。オフ会が続いているのなら、そう教えてくればいいじゃないか。何で嘘をつくのかね。やっぱり嘘はいかんよ」

「ぐぐっ」

そこをつかれたか。と私は黙ってしまった。

「ごめんなさい」

そんなときに平光はいきなり謝る。

「それは俺がメールを送ったんですよ。だってトニーさんが『もう、いいいよ。面倒だから終わったことにしよう。終わったってメール送ってください』っていったからなんですな」

真治は、私を睨みつけた。

「ほら、やっぱり嘘ついているし。しかも嘘の出所はお前じゃないか」

「だからどうした」

と私は急に開き直った。

「俺は、お前のためを思って判断したんだよ。あの会に参加しても、そっちも疲れているし、少ししか加われないし、女の子だってすぐに帰っちゃうだろ。だから損だっと思って、そういう思いをわざわざ伝えるのが面倒になって『終わったよ』ってことになったんだよ」

「いや、だから、それはお前が判断することじゃないだろ」

と真治は吼えた。

「あのオフ会が俺にとって有益かどうかは、参加した上で、俺が判断することじゃないか。その参加権さえもお前は俺から奪ったんだよ。だったら、お前こそ、始めっから俺を誘うんじゃないよ」

真治の料理がやってきたので、少し二人は沈黙する。もちろん、

こいつの論理はおかしい。でもカツカとしていたので、何がおかしいのかわからなくなってきた。というよりも、段々、どうでもいとも思えてきた。しかし、今まで徹底的に、討論しないから、こういうナアナアな関係になって、私が不愉快になるのだ。ここははっきりいわなくてはいけないだろう。

15時から16時まで

「俺は誘う気だった。」

でもそつちが俺を立腹させるようなひねくれた態度ばかりとるから、げんなりして積極的に、誘う気もなくなつたんだよ」

と私は叫んだ。

「おい。真治、昔のお前はどこに行ったんだよ。最近、心に余裕がないじゃないか。」

もっと、素直になれよ」

と私はゆつくりと真治のハートに染みるようにいったのであった。真治の目から涙がにじんでくる。

「悪かつたな。」

「ごめんよ…。違うんだ。」

俺が何で、あんなひねくれた態度をとつたかつて…。

つまり、嫉妬したんだよ。

お前は、俺と同格な気がしていたんだ。そして会うたびに、安心していったんだよ。いや、もっとというと、俺より下のやつがいる。まあ、こんな俺でもあいつよりはままだ、ということを確認するために、会っていたようなところもあるんだ。

だが、いつのまにか、お前は成長しちまった。

いつのまにか、自分中心のオフ会なんて開けるようになってしまった。しかも女の子まで出席しやがる。

俺の立場はどうなるんだよ」

私はその発言をきいて、深く頷いた。

「お前はどうにもならないだろう。お前は俺のことを見くびっていたんだよ。お前が思っているよりも、俺は社交的だった。そして、オフ会も開けた。でも、それだけじゃないか」

「えっ」

真治はまじまじと私を見つめる。

「後は変わらない。

大した人間じゃないんだよ。俺にしたって。

そしてお前も大した人間じゃない。

いいじゃないか、それだけで」

というと私は手を伸ばした。

「トニー、まさか。

こんな俺を許してくれるというのか」

「許す許さないもないじゃないか。お前が勝手にわけのわからないことをして、オフ会に出られなかっただけ。そして、お前が勝手に俺を見くびっていただけなんだよ。

二人の友情は変わらない。

でも、これからは、俺が下だとか自分が上だとかそんな低いレベルじゃなくて、お互いの良いところを認め合い、尊敬できるような友情を育もうじゃないか」

「トニー、俺、泣けてきたよ。ありがとう。ごめん。俺が本当に悪かった」

というとき、握手した。

すると、周囲の人たちがいきなり拍手をしてきた。私たちの剣幕に知らず知らず注目していたらしかつたのである。それにしても、それでハッピーエンドでよかったではないか。もちろん、それが本当のハッピーエンドである確証はないが。

「二人の仲直りに乾杯」

と平光がビールをカチンと鳴らした。

「いやあ、良かった。

良かった」

17時から18時まで

「ありがとうな。わかったよ。あつ、俺、用事があるんで…じゃあね」

というと、真治は急に席を外そうとする。

「えっ、もう帰っちゃうの」

私はわざと驚いたような顔をする。

「うん。」

用事があるんでね」

というと、真治はファミレスの代金をおくと、店から出て行ったのであった。

「平光さん。」

見て。見て。あいつの顔」

と私は指摘する。

窓からみると、真治の顔は真っ赤になって怒っていた。今にも泣きそうになっていた。

「これはどういうことですか」

平光は私の顔をまじまじと見る。

「あいつのよくやる手段ですよ。」

とりあえず『わかった。ごめんな』って謝るんですよ。でも、根本のところでは何もわかっていないんですよ。あいつは、基本的に他人から何かを指摘されるといのが、もう本当に死ぬほど大嫌いで、誰かから注意をされるくらいなら、いつそ死んだほうがまし、という性格なんですよ」

「そうなんですか」

「ええ。」

まあ、俺とあいつは定期的に喧嘩別れするんですが、今回は三ヶ月くらい会えないかなあって思いますね」

「で、ケロツと忘れてまた会う、ってそんな感じなんですか」

「そうですね。」

あいつの中で、何が起きたのだったのはまったくわかっていませんよ。ただ、自分は普通だったのに、怒りっぽいわが意味もなく理不尽に切れた、というぐらいの記憶しかないですね」

「それはちよつとオフ会には参加させないほうがいいかもしれないですねえ」

「そうですね。」

遠くから見る分にはいいですよ。でも近づくと火傷する。それが真治ですから。今にして、思うんですよ。俺の高校時代に一緒にいたグループは、みんなあいつを嫌っていたんですが、どうしてかという、あいつの他人とつきあうスキルのなさが原因なんですね」

「にしても、トニーさんは何でそんな人と友人になっているんですか」

と平光は痛いところをきいてきた。

「寂しいからかな」

と私は窓の外を見ながらつぶやいた。

「そして、そんなあいつが面白いからってのもあるんですよ。本当にあいつ面白いんですよ。何回、笑わせられたことか」

「そうなんですか。」

うーん。それは、何というか。難しい間柄ですね」

「難しいというか、面白い間柄ということでしょうかねえ」

私は時計を見るともう十七時になっていた。三時間も時間が経過していたがまったく気づかなかった。まるで一瞬のことのようであった。

「今日は俺のアパートで飲みませんか。真治のことや、あと最近書こうと思っている小説の構想など、いろいろ語り合いませんか」

「おお。いいですね。実は明日暇なんですよ。しかもフィアンセも実家に帰っていていないんですね」

「それはいいタイミングで会いましたなあ」

私はそういつて笑ったが、少し眠気があった。それを振り切つて、ファミレスから出て、平光とともに電車に乗ったのであった。

18時から19時まで

電車に乗っている最中、私はほとんどワンマンショーみたいな感じで、真治の悪口を話していた。話しているうちに、いろいろなことを思い出して、また腹が立ってきた。それにしてもどうして真治という男と仲が良かったのかというと、いつも彼が車で私のアパートまでやってくるからである。そして一緒に車に乗り、近くのレストランで彼の話を書いたり自分の話しをしたりする。それが気分転換にもなるのだ。と、そう考えるとやはり良い友人であった。私は、だんだん怒りがなくなり、普通に

「あれっ、真治っていいやつじゃん」

と思えてきたのでそれを平光に伝える。

「えっ、さっきまで腹を立ててませんでしたか」

「いや、何だろう。ほら、俺、昔、きいたことがあるんだけど、ガムを延々、何時間も噛み続けていると、急に口の中で消える瞬間があるらしいんだけど、まさにそれだよ。あいつ、実はいい奴じゃないか、とも思えてきた」

「そうなんですか」

「っていうか、やはり今回の件は、彼のおかしな言動をさんざんギヤグにして笑いをとったじゃないですか。それも含めて、やはりあいつは、おいしい奴なんですよ」

「まあ、俺はあんまり、よくわかんないですけどね」

「いやあ、わからないかなあ。伝わらないかなあ。あいつの独特の面白さってのがあって、デイスニーでいったらDonald Duckみたいなところがあるんですね。不平家で不満家で、でもどこか気弱で優しいところがある。そんなやつの魅力があっただよなあ。だから、会っていると、癒されるんですよ。今回だっけそうじゃないですか」

平光は私の隣で座って携帯でミクシイを見ながら私の話をきいて

いたが突然、爆笑する。

「たしかにそうかもしれない。真治君が、あれからすぐに日記を書いているんですが、見てください。これ」

私は平光の携帯を見る。

『今日。俺はある友人から、『オフ会にはお前は呼ばない』といわれた。理由はわからない。俺の親友だと思っていた人間にいきなりこんなことをいわれるのは傷ついた。そもそもあいつは怒りやすい人間なのだ。大したことをしたわけではないのにどうしてあんなに激怒するのだろうか。俺は、俺の本音をそいつだけに暴露していたのだが、俺の本音は、あいつには受け入れてもらえないようだ。本当に悲しい。でも、俺はあいつが冷静になってくれることを願っている。あいつだったならわかるだろう。俺には俺の美学があり、それに従ったまでのこと。もし、俺に美学がなかったら。そもそも俺としても生きている意味があるだろうか？』

私は携帯を見て大笑いした。

「じゃあ、もう、死ねよ！」

といつてから、

「ね。ね。ね。」

まったくわかっていないでしょう。でも、ここまで相手が確信的に、自分を押し通そうとすると、ひよっとして間違っているのは、俺のことかなあ、って思い始めちゃうんですよ。本当に思考回路的に、こんななんですよ。マジで。

いやあ、驚いたわ」

平光も同感だった。

「何でしょうかね。言葉の伝わらない人に説教しているようなものですわ、これ」

19時から20時まで（最終回）

私は話しているうちにだんだん眠くなってきたがさすがに寝るのはまずいだろうと、目を覚まそうとしているが、布団ですでに寝転んでいるので、いつでもスタンバイOKの状態なのであった。しようがないので、押し入れの中からコンパニオンのピルピルちゃんを出す。

「はい、ピルピルちゃん」

今までテレビを見ていたりくだらない話をしていた平光の顔が豹変する。

「何ですか、それは」

私にはっこり笑って答えた。

「えっ、ピルピルちゃん」

「それって、マネキン」

「マネキンじゃないの！僕のピルピルちゃんなの」

という私はピルピルちゃん用の椅子を用意して、ピルピル水を用意した。これは砂糖を薄めた水に念力を入れたものである。

ピルピルちゃんは、今日は、白と黒としましまのワンピースにピンク色の靴下を履いていた。手には鎖が巻いてあり、鎖の先には鼻もげたスヌーピーのぬいぐるみがぶらさがっている。

「トニーさんどうしたんですか。その古びたマネキンどこからとってきたんですか」

「ピルピルちゃんと会ったのは、もう三ヶ月前かなあ。ビルの谷間に彼女がいたんですよ。俺は、女性というものを超えたある種の精神体を欲していたんですが、理想の存在に出会いましたね。彼女こそ僕の永遠の女なんです」

「トニーさん、正気でいつているんですか。悲しすぎる」

「いや、悲しくなんかないもん。これは僕とピルピルちゃんの問題なんですよ。口出ししないでいただきたい。ほらピルピルちゃんも

怒っているじゃないですか」

「わからないですよ。表情ないし」

「ありますよ。感じてください。そうすればわかるはず」

「わからないし、わかりたくない」

「ピルピルちゃん」

と私が高音でわめくと、ドアをドンドン叩く音がする。

私が開けると、パジャマ姿の怖いお兄さんみたいな隣の住人で

「ピルピルピルピルうるせえんだよ」

と怒鳴ってきた。

私はピルピルを連れてきて

「ごめんなさい。あと、嬉しい報告があります。僕たち結婚します」

という隣に住人は

「狂っている」

と叫んで逃げ出した。

「平光さん、あいつ何いつているんでしょうかね。アハハハ」

と私は笑う。

そして、ピルピルちゃんを元の席に戻して、二人で仲良く語っているうちに、平光はそっと立ち上がり、ダッシュして逃げた。

「あっ、平光さん」

と呼び戻そうとしたが、ピルピルちゃんに止められて、私は彼女と楽しいテレパシー会話を続行した。

(完)

あとがき

基本的にあとがきなどを書くのが好きなので書くことにするが本当はボタン間違いで、最終回にできなかったのである。まあ、そんなシステム上の私のミスはいいとして、この小説、うーん。一人の男の20時間の物語が表現されているからいいんじゃないでしょうかね？

小説つてのは、書いてみると意外に読み手がいてくれて面白いものです。一作につき最低、一人、読者がつきますね。私の場合は。

ミナサンも書いてみたらいかがでしょうかね。

私が読者になる可能性はほぼゼロだと思えますが、まあ、それはお互い様（笑）っていうところでしょうかね。

ではでは、次の作品で会いましょう。

多分、近日中にアップします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9333s/>

20時間

2011年5月4日17時55分発行